

第2回 建コンフォト大賞

くらしをささえる“どぼく”

当協会では、広く一般の方々の土木施設への興味を高め、建設コンサルタントをより知っていただくために、昨年より「建コンフォト大賞」を行っています。今回は「くらしをささえる“どぼく”」をテーマに、道や橋、鉄道、上下水道、空港や港、公園や堤防など、私たちの日常生活を支える土木施設のある風景を撮影いただきました。

公募期間は平成22年6月15日～9月30日とし、当協会のHPやWEB上の情報提供サイトへの掲載、新聞社、全国の大学へのポスター配布、会員各社の社内広報媒体などを利用してPRしました。

その結果、全国の幅広い年齢層の方々から139点の応募をいただきました。

審査方法

作品の審査は、当協会の広報委員会委員（11名）が一次選定を行い、審査委員（4名）による最終審査会を経て、表彰作品を決定しました。

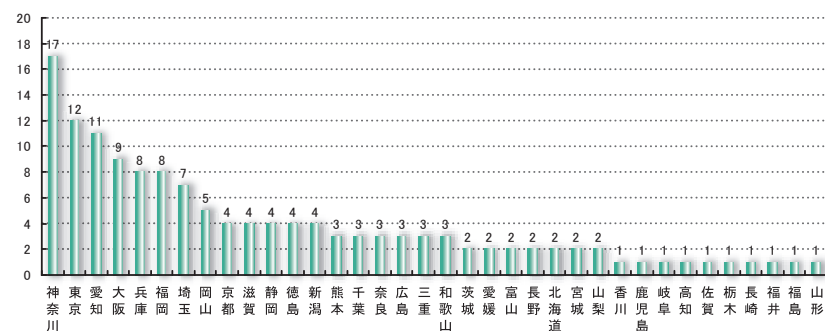
審査結果

最優秀賞1点、優秀賞2点、特別賞10点を決定しました。入賞作品は次ページ以降に掲載するとおりです。

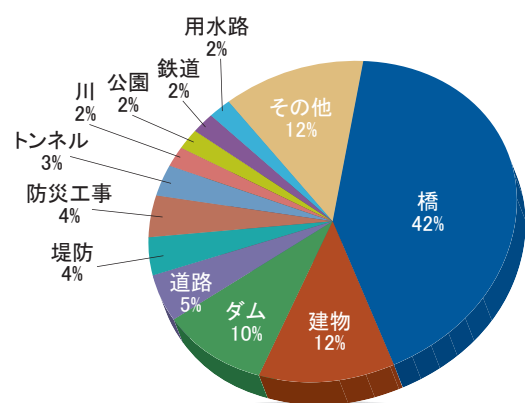
審査委員

審査委員長 伊藤 清忠（東京学芸大学名誉教授）
 審査委員 宇於崎 勝也（日本大学准教授）
 知野 泰明（日本大学准教授）
 初芝 成應（日本写真作家協会会員）

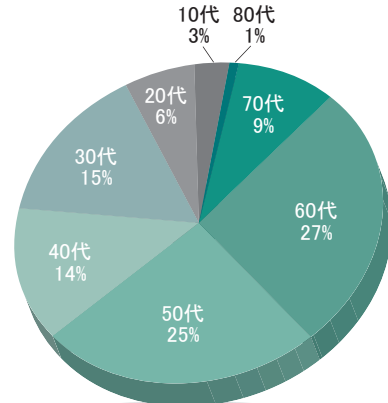
地域別応募者数



写真撮影の対象



応募者の年代



最優秀賞



「海峡の漁」

奈良県 泉 健一

(撮影地：兵庫県 岩屋港沖)

【撮影者のコメント】

春のいかなご漁のシーズンに明石海峡大橋の近くで漁をする船とかもめの群れと明石海峡大橋を対比して撮影しました。(海峡にかかる大橋と海といかなご漁にて)

講評

明石海峡大橋と、春のいかなご漁の漁船につきまとい追うかもめの大群を生き生きと表現している作品です。
 (伊藤 審査委員長)

明石海峡のいかなご漁を被写体とした1枚。かもめの大群は豊漁を予感させるとともに、ダイナミックさを感じさせます。生活の基盤として確立している明石海峡大橋と食の基盤の漁が融合している姿が美しいです。
 (宇於崎 審査委員)

長大にもかかわらず生活の背景となった明石海峡大橋。白色を基調に、かもめ達の群飛と漁船が織りなすドラマチックな光景とが渾然一体。まさにベストショットです。
 (知野 審査委員)

白波をたてて小さな船で漁をする冷静な二人の漁師と、背景の海峡都市と大橋と共に息づく暮らしが印象的です。この構図でのシャッターチャンスは困難を極めたと思像できますが、とても鮮明でブレがなく美しいです。
 (初芝 審査委員)

優秀賞



「五月の風を受けて」

静岡県 滝井千恵子

(撮影地：高知県西土佐村 岩間沈下橋)

【撮影者のコメント】

四万十川にかかる沈下橋は増水時に橋が沈んでしまうように作られた欄干のない橋の事。さわやかな5月連休に旅をしました。ふだん見慣れない橋の形にびっくり。車もすいすいと渡り更にびっくり!!! 川と橋と人々の生活の関わりを感じる風景にとっても感動致しました。

講評

五月晴れの空と新緑が清流の水面で増幅し、薫風を受けて沈下橋を渡る情景から受けた感動が素直に表現されています。(伊藤 審査委員長)

四万十川の岩間沈下橋は増水時に水没するユニークな橋です。地元のかたは自転車でも自動車でもスイスイと通行します。この作品にはそれを伺わせる自転車の動きとともに、水面の静けさ、スマートな橋の三者が良くマッチしています。(宇於崎 審査委員)

美しい青と緑を横切るシンプルな直線からなる構造物。まさに土木の原点です。土木技術者が心に留めておくべき風景の一つではないでしょうか。(知野 審査委員)

若葉の美しい四万十川に架けられた沈下橋の姿と、優しく流れるエメラルドグリーンが美しく川面に放ち、唯一自転車で渡る姿が印象的で、全てを受け入れている四万十川と沈下橋の役割が美しく表現されています。(初芝 審査委員)

優秀賞



「白銀の架け橋」

富山県 原口 裕

(撮影地：北海道 国道273号 三国峠)

【撮影者のコメント】

撮影地の三国峠は、標高 1139m で国道では北海道一の峠の高さです。撮影時期は3月でまだ氷点下の気温で周りは白一色で非常に寒い日でした。眼下に広がる白の原生林と東大雪の山々の景観が素晴らしいところで雄大な風景を実感致しました。この作品を選んだ理由としては、険しい原生林の中に立派な橋があり、この橋が無くては道ができないと言っても過言でないような地形に架かっていて、作る「どぼく」の必要性を痛感しました。また除雪車がたまたま走るのを見て、橋・道をまもることで、冬の厳しい環境の中で山里と街をつなぎ生活のライフラインも保たれると思いました。

講評

標高 1139mの三国峠の雄大な風景、原生林に架けられた橋梁、氷点下の厳しい環境で山里と街を黙々と守る除雪車から受けた静かな感動が表現されています。(伊藤 審査委員長)

北海道三国峠に架かる原生林を貫くように走る国道をとらえた1枚です。凍てつく冬の中にも生活を支える土木構造物があり、それが機能するように整備されている様子をとらえており、静寂の中にエンジン音が聞こえてくるようです。(宇於崎 審査委員)

厳冬が残した足跡を2台の除雪車が消して行く姿は、この冬も要となった勇者達の凱進行進のよう。そのステージである緩やかな白い曲線は、まさに人が作り得た作品。春間近を感じます。(知野 審査委員)

厳冬の雄大な原生林と白一色の白銀の世界が凛と引き締まった臨場感とともに画面いっぱいに繰り広げられており、この原野にこの豪雪と橋梁路面に雪上車が走る静寂の世界に土木と暮らしの重要性を感じないではいけない、見事な作品です。(初芝 審査委員)

特別賞



「渦巻く潮流に架ける」

徳島県 下村 正美

(撮影地：鳴門海峡 大鳴門橋と渦潮)

【撮影者のコメント】

この鳴門海峡は、潮流の早さでは世界三位、渦潮の大きさでは世界一位です。そこへ橋を架けている。若き頃、土木技術者になりたくて高校の土木科を専攻しました。卒業時に以前の建設省に受かったのですが、大学の工業デザインに進みました。今も魅力的な土木構造物の写真を撮り続けています。この大鳴門橋と渦潮の対比を撮るのに3年ほどかかりました。世界一を誇る日本の土木技術の素晴らしさを感じます。

講評

世界屈指の潮流の速さと渦潮の大きさ、その迫力と魅力に、そこに架かる大鳴門橋への作者の思いが表現されています。



「帰り道」

愛知県 大嶋 武夫

(撮影地：旧揖斐川橋梁)

【撮影者のコメント】

以前は電車が走っていた橋梁。今は住民の大事な生活道路として活躍しており様々な人が利用している大事な橋です。

講評

この橋が地域の人々が利用する重要な生活道路であることが、自転車にポリタンクを載せて走る女性の姿とベンキが剥がれ錆が露出した鉄骨に滲み出ています。

特別賞



「川遊び」

佐賀県 福原 良一

(撮影地：福岡県東峰村 棚田親水公園)

【撮影者のコメント】

近年、川遊びをする場所が減っています。今後は、川（水）と親しむ河川工事を行ってほしいものです。

講評

親水公園で川遊びをする子供たちの姿は最近あまり見ることがなくなりました。非常に楽しさを感じさせる作品です。豊かな河川整備を行った様子が上手に撮りこまれています。



「幻想」

愛知県 大西 宏徳

(撮影地：名古屋市 オアシス21)

【撮影者のコメント】

オアシス21の公共建築物「水の宇宙船」上で撮影。水面上のカーブミラーで、何とか建築物を幻想的に表現したいと考え、自ら動き回り、建築物が3枚のカーブミラーに収まる位置を探し出しました。そして、風が収まり、雲が気に入った形になった瞬間シャッターを切りました。構図的には、視点が下から上へと動くように、3枚のカーブミラーのサイズバランス等を考慮し作画しました。

講評

オアシス21の水を張った屋根「水の宇宙船」に沈められた大小3種類のカーブミラー、それに映った建築物と雲、周囲の水面と構造物などの対比が優れています。

特別賞



「棚田秋景」

和歌山県 木下 滋

(撮影地：和歌山県有田川町 あらぎ島の棚田)

【撮影者のコメント】

日本の棚田100選の一つ「あらぎ島」の秋の風景です。数年前に道路のバイパス工事がなされ、棚田の上を走る道ができました。近隣住民の生活道路として、なくてはならない道になっています。景観にもマッチして、風景にすっかり溶け込んでいます。

講評

和歌山県のあらぎ島の棚田の風景です。日本の文化的景観の代表ともいえる棚田にとけ込む地元の生活道路の姿はとても馴染んで見えます。自然と人工構造物が対比ではなく、馴染みの良い姿として見えます。



「TUBE」

埼玉県 宮崎 賢治

(撮影地：埼玉県 荒川水管橋)

【撮影者のコメント】

家から自転車で15分程のところにあるこの荒川水管橋があります。延長は1100m程で日本一のことです。見るからに壮観で土木構造物とはいえ美観にも優れているのではないのでしょうか。この写真は、朝6時頃朝日を受けて左岸側から右岸に向けて撮った写真です。上水運ぶ水管そのものは人体の血管のように無くてはならない貴重なもので何故か血管と投影し、朝日を受けた構造物の荘厳さが表現できたらいいなと思っております。

講評

水管橋。そのひかえめな構造物が、陸地を横断する長大な奥行きをもって写し出されています。ヨーロッパにて近代初頭に建設された数々の著名な運河橋梁を想起させます。

特別賞



「天空のベビーカー」

茨城県 上西 裕子

(撮影地：名古屋市 オアシス21)

【撮影者のコメント】

旅の途中、久しぶりに名古屋市内を散策。かつてとは大きく変化した街に目を奪われつつ近代施設に人々が楽しそうに集う様子が印象的でした。中でも、このオアシス21の広場は、緑と水と建物のコラボレーションが素晴らしい空間でした。

講評

21世紀の建造物オアシス21の水を張った屋根「水の宇宙船」を見上げ、若い母親とおさな子を、若々しい視線で楽しく撮られています。



「二つのアーチ橋」

岡山県 斎藤 孝子

(撮影地：山口県岩国市 錦帯橋)

【撮影者のコメント】

「日本三名橋」や「日本三奇橋」と言われている岩国市の錦帯橋。五連からなる木造のアーチ橋はあまりにも有名。何回か行って見たが春の桜、夏の鶉飼、秋の紅葉、いずれも風情があり、また行ってみたいくなります。この写真は夏の鶉飼を撮影しに出かけたとき一枚で、観光中の若い人たちがアーチ橋の形をしてくれ、ユーモラスな一枚となりました。

講評

人が作ったアーチを重ねてユニークな姿を表現したアイデアの面白さが伝わってきます。アーチを作る女性たちの笑顔も良く、土木構造物である橋が、生活や観光に根づいている様子を伺うことができます。

特別賞



「放流の夏夜」

大阪府 太田 年彦

(撮影地：京都府宇治市 天ヶ瀬ダムと天ヶ瀬発電所)

【撮影者のコメント】

宇治市にある天ヶ瀬ダムは普段、大きなダム湖である鳳凰湖を支える静かで重厚な装いですが、大雨の後の大放流では一転、激しい水煙と荒波が宇治川を変貌させ、地鳴りの様な音が真夏の夜に響き渡り、躍動感が溢れています。隣接する天ヶ瀬発電所では夜中も照明が煌々としており、昼夜を問わず電気の供給が行われていることが実感できます。この天ヶ瀬ダムらが目一杯に活躍している姿を写真に表したく、「放流の夏夜」に撮影しました。

講評

洪水時のダム放流という激しい場面を、幻想的なシーンに写し変えることに成功しています。漂うはずの緊張感が、光と噴霧が織りなす美しさへと転化しました。



「用水に映る伝統文化の風景」

東京都 岡村 幸二

(撮影地：金沢市長町 大野庄用水)

【撮影者のコメント】

複雑に入り組んだ石畳の路地に沿って、黄土色の土塀が連なり小京都の面影を色濃く残しています。古くから生活用水や農業用水に利用され、いまでも自然石の統一された「縁石」と石積の護岸には、金沢ならではの品格が感じられます。

講評

古い街並みの用水路は土木としての規模も小さく水量も限られていますが、この町を流れる用水は水量も豊富で流れも速く清流で、しっかりとした土塀と石積み姿を残し城下町としての風格があり、日本の用水土木の美しさと強さを捉えています。

[受賞作品マップ]



当協会では平成 23 年度も作品を募集する予定です。
土木施設の魅力を伝える作品の応募をたくさんお待ちしております。